

<資 料>

肉用牛の改良促進調査研究
-アニマルモデルによる育種価の推定-

片岡博行・小林 宙・西川早百合*

Study of Improvement of Japanese Black Cattle
-Presumption of Breeding Values by Animal Models-

Hiroyuki KATAOKA, Hiroshi KOBAYASHI and Sayuri NISHIKAWA*

要 約

岡山県の和牛(黒毛和種)における産肉形質の遺伝的な改良を推進するため、最良線形不偏予測 (Best Linear Unbiased Prediction、BLUP と略す)法アニマルモデル((公社)全国和牛登録協会作製)による育種価を推定した。この第 48・49 回育種価は、種雄牛の選抜に活用するとともに優良雌牛の選定・保留などの和牛改良の基礎資料として、畜産関係機関及び畜産農家へフィードバックを行った。以下、第 49 回育種価について報告する。

- 1 分析に用いた枝肉成績は、44,914 件であった。
- 2 育種価判定頭数は、種雄牛 1,384 頭、繁殖雌牛 30,464 頭であった。
- 3 育種価が判明した繁殖雌牛のうち供用中と考えられるものは、4,290 頭であった。

キーワード:和牛、黒毛和種、育種価、BLUP 法、アニマルモデル

緒 言

岡山県の和牛(黒毛和種)における産肉形質の遺伝的な改良を推進するため、BLUP 法アニマルモデルによる育種価を推定し、種雄牛の選抜に活用するとともに、優良雌牛の選定・保留などの基礎資料として、畜産関係機関及び畜産農家へフィードバックを行った。以下、最新の第 49 回育種価成績を基に、県下繁殖雌牛の育種価の概要について報告する。

材料及び方法

1 分析材料

分析に供した枝肉データは、1988 年 12 月から 2019 年 2 月までに収集された枝肉データ 45,093 件のうち、病牛と考えられるものや肥育農家が不明なもの 179 件を除いた 44,914 件を用いた。なお、枝肉データ収集場所は、岡山県営食肉地方卸売市場ほか 39 カ所の食肉市場であった。

2 分析対象形質

分析を行った枝肉形質は、枝肉重量、ロース芯面積、バラの厚さ、皮下脂肪厚、歩留基準値及び脂肪交雑(BMS No.)の 6 形質とした。

3 遺伝的パラメーター及び育種価の推定に用いた数学的モデル
対象集団の遺伝的パラメーター及び育種価については、BLUP 法アニマルモデルにより推定した。なお、数字モデルは次に示したとおりである。

$$Y_{ijklm} = \mu + S_i + N_j + H_k + A_{ijklm} + b_1(X_{ijklm} - \bar{X}) + b_2(X_{ijklm} - \bar{X})^2 + b_3(R_{ijklm} - \bar{R}) + E_{ijklm}$$

Y_{ijklm} : 枝肉成績の観測値

μ : 全平均(基準年=1975 年)

S_i : 性の効果(母数効果)

N_j : 出荷年次の効果(母数効果)

H_k : 肥育者の効果(変量効果)

A_{ijklm} : 育種価

b_1, b_2 : 出荷月齢に対する 1 次及び 2 次偏回帰係数

X_{ijklm} : 出荷月齢

\bar{X} : 出荷月齢の算術平均

b_3 : 近交係数に対する 1 次回帰係数

R_{ijklm} : 近交係数

\bar{R} : 近交係数の算術平均

E_{ijklm} : 残差

* : 現 岡山家畜保健衛生所

結果及び考察

1 枝肉データ及び基本的統計数値

収集した枝肉データを出荷年別にまとめ、それぞれについて、枝肉データ数及び出荷月齢、枝肉重量、ロース芯面積、バラの厚さ、皮下脂肪厚、歩留基準値、BMS No. の平均を表1に示した。

分析した枝肉形質について、2010年の出荷はそれ以前に比べて月齢が長くなる傾向が見られたが、2011年以降は横這いの傾向であった。枝肉

重量の伸びは鈍化していたが、2014年は増加し2017年以降ではその伸びは鈍化している。

ロース芯面積は、2011年以降増加傾向であったが、2014年以降は横這いであった。BMS No. は、2011年以降増加傾向である。性別では、去勢が雌に比べて出荷月齢約1.5ヵ月短くなっていた。

さらに、枝肉データから血統を5代祖まで遡った血縁データは、31,848件(種雄牛1,384件、繁殖雌牛30,464件)であったことから、この件数が、

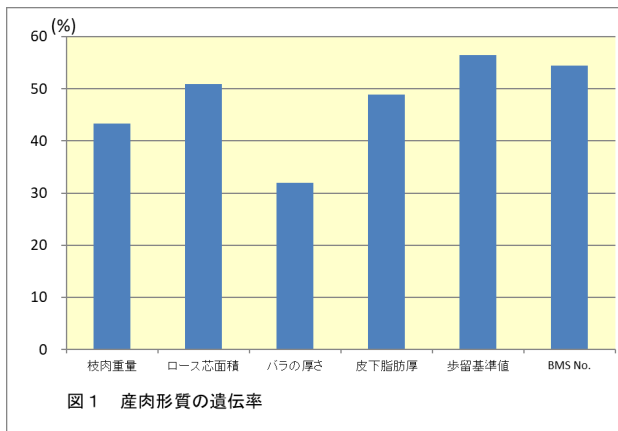
表1 出荷年別枝肉成績 (第49回育種価) (件、月齢、kg、cm²、cm、%、BMS No.)

出荷年	1989~2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	
雌	枝肉データ数	5,550	852	953	927	1,031	855	896	758	883	682
	出荷月齢	26.47	29.94	29.69	29.89	29.75	29.72	29.55	29.82	30.05	30.00
	枝肉重量	357.74	429.53	424.72	434.21	439.46	446.86	444.46	449.27	452.60	445.26
	ロース芯面積	45.65	52.52	52.91	54.89	55.88	58.33	58.39	58.94	59.02	58.08
	バラ厚	6.10	7.25	7.34	7.40	7.44	7.39	7.50	7.57	7.51	7.23
	皮下脂肪厚	2.47	2.91	2.82	2.87	2.98	3.09	3.21	3.17	3.14	3.13
	歩留基準値	65.08	73.08	73.34	73.48	73.46	73.56	73.57	73.66	73.62	73.41
	BMS No.	4.32	5.29	5.35	5.72	5.71	6.14	6.29	6.76	6.64	6.57
去勢	枝肉データ数	16,000	1,869	1,786	1,853	1,814	1,678	1,575	1,683	1,627	1,534
	出荷月齢	25.18	29.05	28.59	28.84	28.71	28.83	28.55	28.59	28.68	28.57
	枝肉重量	392.55	482.08	475.03	481.10	482.48	488.93	489.29	490.47	494.05	494.64
	ロース芯面積	46.30	54.81	54.35	55.62	56.68	58.02	58.40	59.01	60.36	60.01
	バラ厚	6.28	7.45	7.55	7.56	7.61	7.63	7.71	7.66	7.74	7.56
	皮下脂肪厚	2.16	2.50	2.51	2.45	2.54	2.68	2.70	2.62	2.60	2.56
	歩留基準値	64.95	73.23	73.32	73.48	73.55	73.53	73.60	73.70	73.91	73.77
	BMS No.	4.56	5.80	5.69	6.05	6.03	6.16	6.48	6.74	7.07	7.25
全体	枝肉データ数	21,550	2,721	2,739	2,780	2,845	2,533	2,471	2,441	2,510	2,216
	出荷月齢	25.51	29.32	28.97	29.19	29.09	29.13	28.91	28.98	29.16	29.01
	枝肉重量	383.59	465.62	457.52	465.47	466.89	474.73	473.03	477.68	479.47	479.45
	ロース芯面積	46.14	54.09	53.85	55.38	56.39	58.12	58.39	58.99	59.89	59.42
	バラ厚	6.24	7.39	7.48	7.51	7.55	7.55	7.63	7.63	7.66	7.46
	皮下脂肪厚	2.24	2.63	2.62	2.59	2.70	2.82	2.88	2.79	2.79	2.74
	歩留基準値	64.98	73.18	73.33	73.48	73.52	73.54	73.59	73.69	73.81	73.66
	BMS No.	4.50	5.64	5.58	5.94	5.92	6.16	6.41	6.75	6.92	7.04

今回の育種価判明頭数であった。

2 産肉形質の遺伝率

枝肉データから推定された産肉形質の遺伝率を図1に示した。

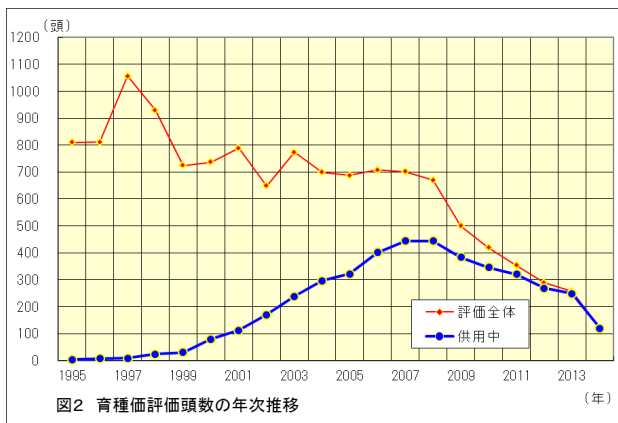


これによると、いずれの産肉形質についても30%以上の遺伝率を示した。ロース芯面積、歩留基準値及びBMSNo.の遺伝率は高く50%を越えている一方、バラの厚さは約30%で、他の形質に比べて環境要因の大きいことが伺えた。

3 育種価の概要

(1) 育種価判明状況

繁殖雌牛について、過去3年間に分娩が確認されたものを「供用中」とし、その頭数は4,290頭で、うち3,370頭が県内に所在しており、2018年2月1日現在の岡山県の繁殖雌牛頭数は6,198頭であることから、繁殖雌牛群の育種価判明率は54.4%と推定した。



また、繁殖雌牛について、生まれ年別の育種価評価頭数を図2に示した。なお、2014年生まれは枝肉成績が得られたものの評価値である。

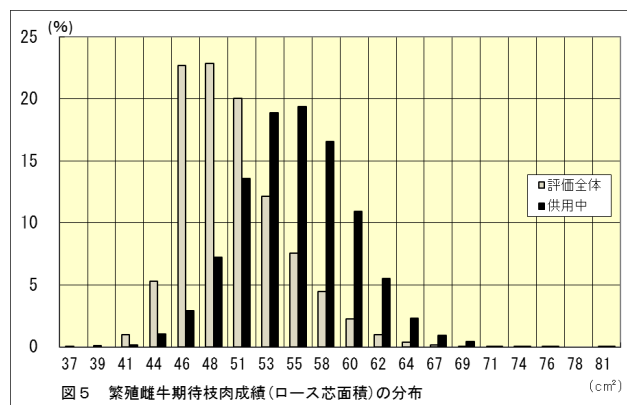
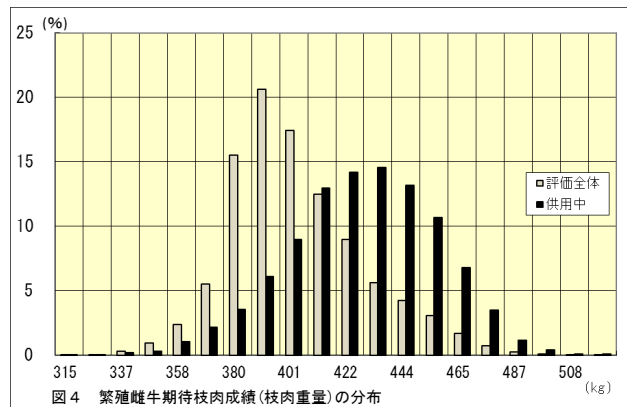
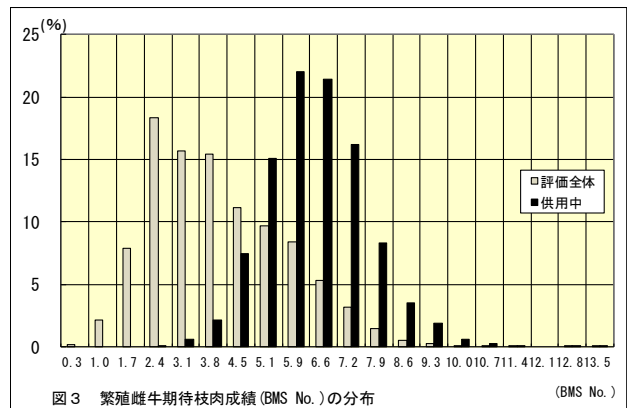
(2) 育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の分布状況

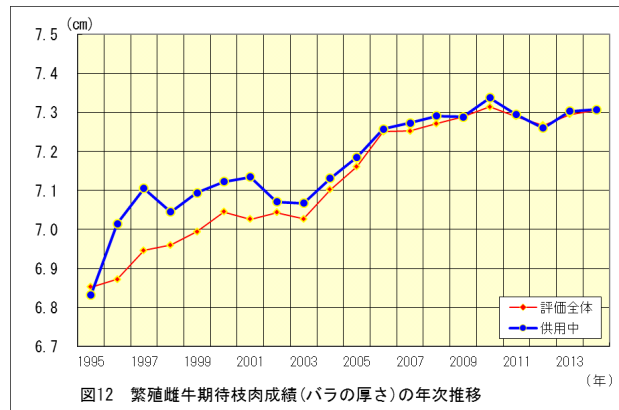
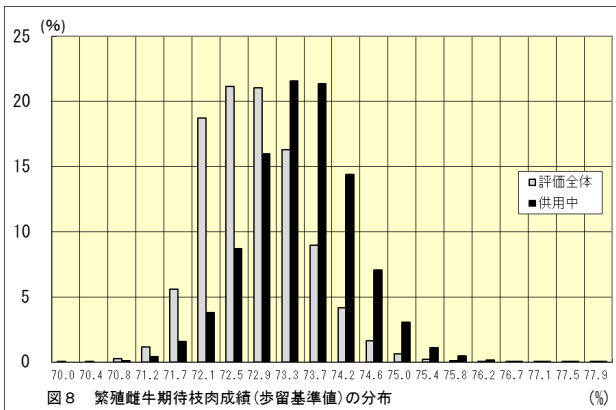
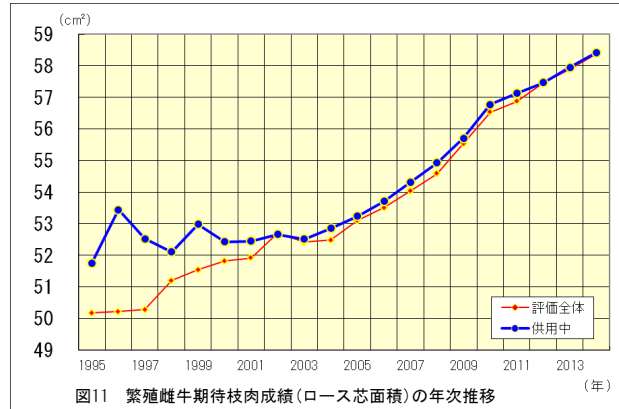
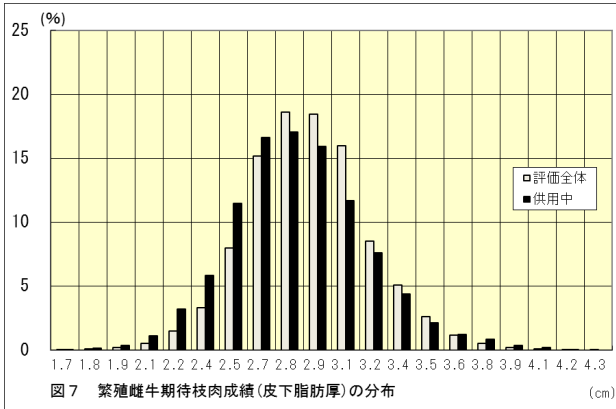
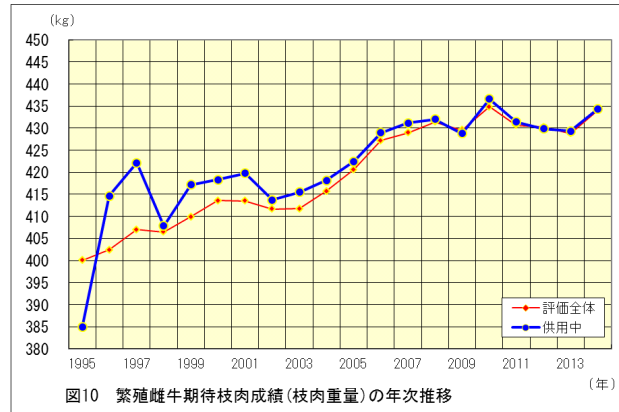
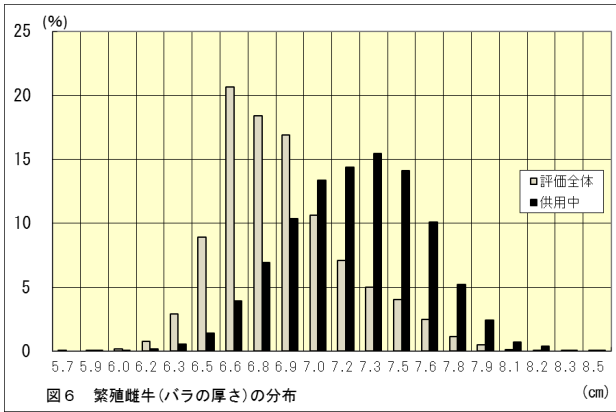
育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の分布を図3～8に示した。

産肉能力の分布では、全ての形質で供用中のものが、評価全体よりも能力が向上していることを

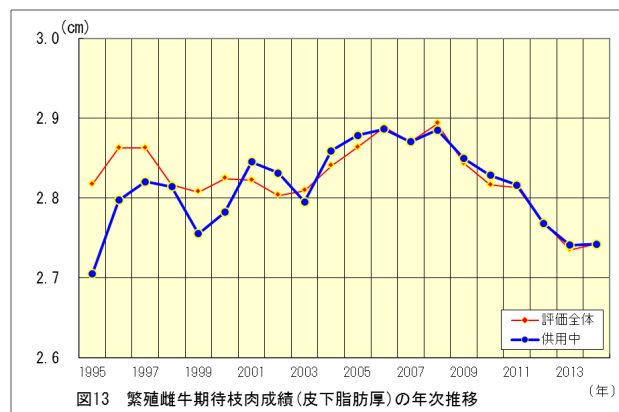
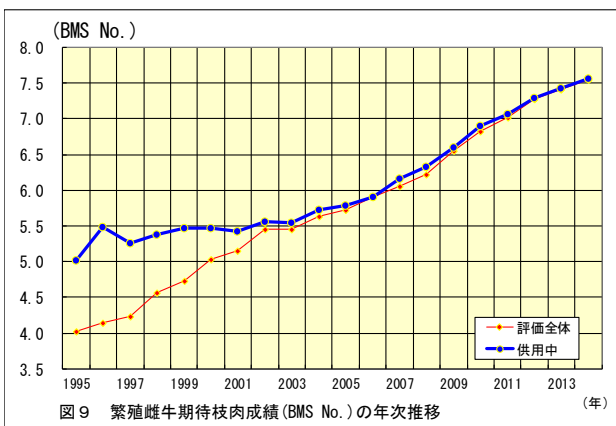
示していた。この傾向は、BMS No. で特に顕著であり、繁殖農家において、肉質を中心とした改良が積極的に行われていることが推測される。

一方、枝肉重量、ロース芯面積及びバラの厚さといった肉量に関わる形質については、評価全体よりも供用中のもので、期待成績の分布が広がる傾向が見られた。また、皮下脂肪厚については、評価全体と供用中のものとは分布の差が見られなかった。肉質に比べ、肉量や歩留まりによる選抜が積極的でないことが伺える。





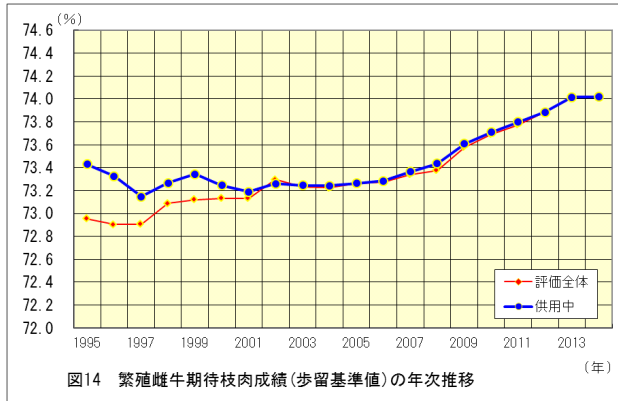
(3) 育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の遺伝的すう勢
 育種価から推定される繁殖雌牛の期待枝肉成績の各項目について、繁殖雌牛の生まれ年別の平均値の推移を示した(図9～14)。



いずれの形質も改良が進んでおり、改良が進んでいなかった皮下脂肪厚についても2008年生まれ以降、急激に改善された。特に、1998年生まれ以降の繁殖雌牛の産肉能力は肉量、肉質ともに優れており、これは1994年から開始した育種価に基づく保留手法の定着や現場後代検定による精

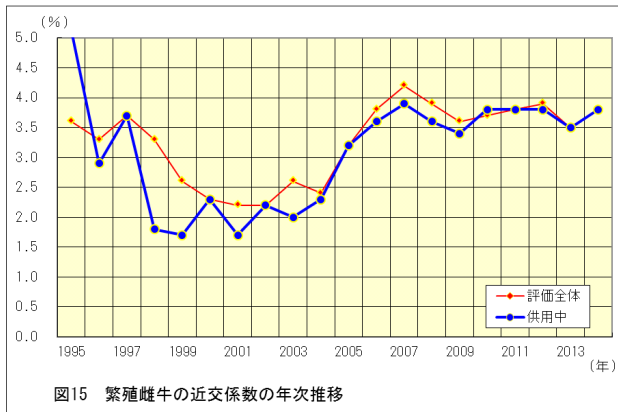
度の高い種雄牛造成によるものと考えられる。

ただし、2007 年生まれ以降の繁殖雌牛の枝肉重量、バラの厚さはともに停滞傾向が見られる。



(4) 近交係数の年次変化

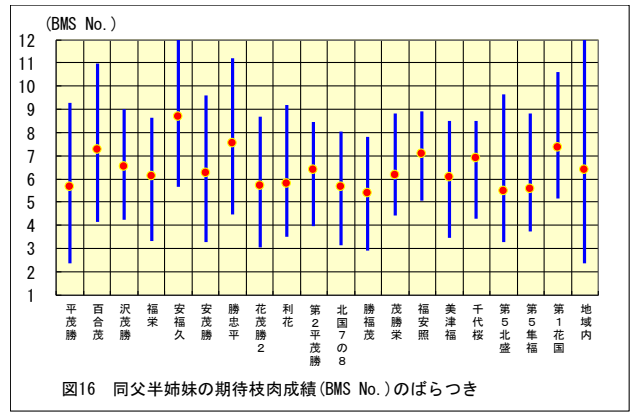
繁殖雌牛の近交係数の年次変化を図 15 に示した。



1997 年生まれ以降減少していたが、2002 年以降徐々に増加し、2007 年生まれは 4% を超える水準となったが、2009 年生まれでは再び減少に転じた。これらの傾向は、交配される種雄牛の変化を反映しており、2009 年生まれ以降では、それまでと系統の異なる種雄牛の利用が進んだと考えられる。

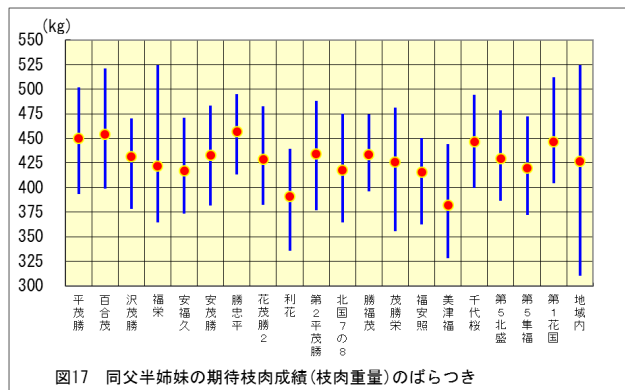
(5) 同父半姉妹間の期待枝肉成績のばらつき

育種価判明娘牛が多い 19 頭の種雄牛の父方半姉妹の期待枝肉成績の平均値と標準偏差を図 16 及び 17 に示した。



同一種雄牛でも娘牛の育種価には、かなりのばらつきが見られる。雌牛の保留(母牛の後継選抜)は、種雄牛と母牛の育種価から算出した期待育種価を基に選抜し、その後母牛から生まれた第一子の枝肉データによる母牛の育種価が判明してから、最終の保留決定を行うことが改良上重要である。

また、現在、育種価未評価の雌牛を対象に一塩基多型(SNP)に基づく産肉能力のゲノミック評価を行っており、これらの評価結果の活用が期待される。



参考文献

1) (公社)全国和牛登録協会情報解析課(2013)：育種価評価の現状，和牛，第265号，11-26.